

女性の出家と古典文学

日本と西洋

NUNS AND THE LITERARY CANON

Japan and The West

Barbara RUCH*

Japan is rightly proud of its golden age of women writers during the Heian period. Due to the efforts of many scholars, the writings of such women as Murasaki Shikibu and Sei Shonagon have become famous world wide. But equally prevalent abroad is the conception that between the Heian period and modern times, women made virtually no creative contributions whatsoever to Japanese art, literature or religion. Certainly nothing about their contribution is taught even today in Japanese schools.

It was my accidental encounter with the 13th-century statue of the eminent Zen abbess, Mugai Nyodai, that altered my own view of this lacunae, and indeed the subsequent course of my scholarly life. Although virtually the founder of the Five Mountain Convent Association of medieval Japan, she does not appear even in Zen history. In this talk I treat her as a symbol warning us of the

*バーバラ・ルーシュ 米国コロンビア大学で博士号取得。ハーバード大学助教授などを経て、現在コロンビア大学教授、中世日本研究所所長。著書「もう一つの中世像」（思文閣出版）は、南方熊楠賞などを受賞している。

extremely important areas of Japanese literary and religious history to which we have failed to give proper attention.

The history of Japanese Buddhism, as it is now written, is based on the premise that men are the teachers of Buddhism and women learn from men. The paradigm is “male priests teach other priests, laymen and women”. Occasionally we see a layman teach Buddhism to a woman, such as in the case of *Sanbôekotoba*. But the gender paradigm remains the same.

Herein I review the evidence that negates this paradigm, such as the proselytizing nuns in the *Nihon rôiki* and the *etoki* nun in *Taima mandara engi e*. I then outline the case of Mugai Nyodai's neglected *koan waka* and then proceed to examine in detail the late Muromachi-early Edo data on a very different kind of nun, the *Kumano bikuni*. To date, researchers have tended to gather data and create a montage image which assumes them to be simultaneously prostitutes as well as proselytizers. Using both literary and visual data I propose at least two quite separate groups: one engaged as serious *etoki* teachers of Buddhism and the other as itinerant singers of popular songs. One specific uniquely female-oriented message of the *etoki* nuns is analyzed: their introduction of the Nyoirin Kannon as savior of women from the “Lake of Blood Hell”.

Important contributions to literature, music, and religious teaching by tonsured women ecclesiasts in the medieval Latin West are introduced to provide context to the Japanese examples of women religious teachers and to emphasize the importance of pursuing gender studies in Medieval Japanese literary and religious history.

ただいまご紹介にあずかりました、コロンビア大学のルーシュでございます。このような国際国文学の集まりで専門の研究者の方々に前にして講演をするという名誉を与えられましたこと、たいへんに光栄に思います。私のようなものが日本語で講演するなど、ちょっとあつかましい感じがしますが、お集まりの皆様方は、多くの方が若い方々で、これから本格的な研究生活をお始めになるとされる人たちだとお聞きましたので、それなら、私のようなものでも、年の功と申しましょうか、私なりの経験をごひろうして、なんらかのお役に立てるのではないかと考えております。

ただ、このなかには、私より経験が豊富で、しかも立派な業績をお持ちの方々がいらっしゃいますので、私としましては、たいへんに話しづらいのですが、しばしのあいだごかんべんくださいますようお願い申し上げます。

私も、若いころ、いったい何を研究すべきか、せっかくここまで一生懸命に勉強してきたのだから、何か意義のある研究をしたいが、何をしたらよいのか分からないというようなことがあり、ずいぶん悩みました。でも、考えてみますと、若いときに、悩まないほうがむしろおかしいと思います。おそらく、このなかにも、このような問題で悩んでおられる方々が多いと思いますが、それが正常であって、何も悩まず、研究をしている人のほうが異常なのではないかと思えます。

さて、みなさま方のなかには、なぜ文学に関する集会で、私が、女性の出家をテーマとして講演するのか、不思議に思われている方が多いと思います。というのは、出家というテーマは、文学で論じられるというより、むしろ、宗教で論じられるものと思われるからです。さらに、この講演のテーマは、学問というより、なにか女性解放運動の一部、あるいはフェミニズムの色彩が強いとお感じになるかもしれません。しかし、私はそういう目的で、本日、お話し申し上げているわけではありません。実は、徐々にお分かりいただけたと思いますが、この問題は、文学の研究だけでなく、文化史にとっても大変に重要なテ

マであると思っております。このテーマは、女性を越えて、男と女、すなわち両方の性、人間そのものに関する重要な問題を提供するものであると、私は強く感じます。

そのためには、まず第一に、なぜ私が、これを重要であると考えているかを、説明しなければなりません。おそらく、私の個人的経験をお話して、なぜこのテーマに興味をいだき、重要と見なすようになったかを、説明するほうが分かりやすいと思います。その経験とは、これからお見せする一枚の写真を見たとき、私が感じたおどろきのことです。(スライド) これは、鎌倉時代の彫刻です。この彫刻の人物と出会ったとき以来、私の学者としての人生は完全に変わってしまったといってもいいすぎではないでしょう。この人物はそれほど大きな影響を私に与えたわけです。

実を申し上げますと、この女性に出会ったとき、私は怒りと恥ずかしさを感じました。その怒りは、日本文化について最高級ともいえる教育を受けていながら、彼女については何も教わらなかったことに対して向けられたものでした。また、その恥ずかしさは、長年のあいだ日本文学や日本文化について学び、そして研究してきたつもりでしたが、そのような人間が実在したにちがいないと、私自身がもっと前に思っていたらなかったことに対してでした。なんらかの疑問を感じて、さがすべきだったのに、そうしてこなかった自分自身に対して、怒りを感じると同時に、恥ずかしく感じたわけです。

この人物との出会いは、いまから十五年ほど前に起こりました。たまたま私は、至文堂から出ている『日本の美術』の特別号を見ていました。1976年に西川杏太郎氏が編集された「頂相彫刻」の特集でした。頂相彫刻とは、ご存じのように、禅の高僧の姿をうつした木彫りの座像で、非常に写実的な作風を特徴としています。それというのもこのジャンルの木像は、いわば師の身代わりとして、師の没後もその姿勢の神髄を弟子たちに伝えようとするものだからです。

ご存じの通り、私の専門は、美術でも宗教でもなく、中世の文学です。この『日本の美術』の「頂相彫刻」という特別号を開いたのも研究のためというよ

り、むしろ中世文化のよく知らない側面について知りたいという漠然とした好奇心にかられてのことでした。

こうした彫像の写真を数多くまじえたページを繰って行くと、剃髪した、墨染めの衣に身を包んだ禅僧の姿は、私の目にはどれも似たりよったりに見えました。ところが、そのなかにただ一つ、はたと手を止めざるを得ない写真に出会いました。衣や頭は同じ姿でありながら、どこか違うのです。おどろいたことに、これは13世紀末の女性の僧侶、つまり、尼僧の肖像でした。(スライド)中世の禅尼の頂相を見たのは、この時がはじめてでした。この彫像には、もはや女性固有の衣装や物腰をうかがわせるものは何一つ残っていません。同じように頭をそり、僧衣をまとして男性の禅僧と一見なんの違いもないものです。にもかかわらず、頬の肉付き両肩のまろやかさは、まぎらうことなく老年の女性らしさを示しています。たしかにこれは一人の女性の肖像でした(写真1参照)。

この女性の法名は、^{むがいによだい}無外如大といい、鎌倉中期、貞応2年(1223)に生まれ、永仁6年(1298)に没しています。彫像の作者は分かりませんが、まれにみる



写真1 無外如大禅尼像

才能の持ち主であったにちがいありません。すでに七十歳代に達した一人の真摯な女性の、静かな、しかし威厳に満ち、深い内省をたたえた風貌をみごとにとらえています。

無外如大禅尼の顔は、一度目にすれば、忘れることができません。

無外如大は、鎌倉で中国から来日した無学祖元の教えを受けたのち、京都の北のほうに景愛寺を建てて、その主となったばかりか、多くの末寺までかかえることになりました。そして景愛寺はその後、

室町時代を通じて、尼寺五山の中心をなすにいたります。男性の五山については、外国語でも比較的良好に研究されていますが、尼寺五山に関しては、英語はもちろん、日本語でさえ、著書はおろか論文もまだ書かれていません。彼女は、いったいどんな生涯を送り、彼女の指導した尼寺五山とはどのような性質のものであったのでしょうか。このような観点から見ると、彼女の生涯は単なる歴史的な興味を越えて、大きな重要性を帯びてくるような気持ちになります。というのも、このような疑問を解くためには、広く当時の社会全体にかかわる、さまざまな問題を掘り起こして行かなければならないからです。

当時の社会をよりよく理解するために、また、宗教上からも、無外如大が新しくつくった尼寺、そして彼女が指導した組織が、大変に重要な意味をもつことは疑いようがありません。にもかかわらず、それが具体的にどのようなものであったかは、残念ながらまだ十分研究されていないのです。昭和48年（1973年）に、無外如大の彫像は重要文化財の指定を受けましたが、現在なお無外如大自身は、一つの文化的挑戦として私たちの前に立ちのどかっているといえるでしょう。

無外如大は、宗教界においてたしかに大きな影響を及ぼしたかもしれない、しかし、それが国文学となんの関係があるのかとお考えになっていらっしゃる方が多いのではないのでしょうか。そういう疑問は、もっともだと思います。本日の講演のタイトルは、「女性の出家と古典文学」でありますから、たぶん、『十六夜日記』の阿仏尼、あるいは尼になってから『とはずがたり』を書いた二条殿について私が講演するのではないかと想像されたと思います。

しかし、私は、本日の講演を、無外如大という尼僧についてお話しすることからはじめました。その理由は、私がこの女性を一つのシンボルと見なしているからです。われわれは、何が国文学において研究に値するかということに関して、固定観念のようなものをもっており、そのため重要な研究テーマを見落としてしまうことがよくあります。つまり私にとって、無外如大禪尼は、われわれがおちいる過ちのシンボルなのです。だから、あえて、こうして無外如大

にこだわっているわけです。

しかし、理由はそれだけではありません。私には、もう一つ別の理由があります。それは、誰も無外如大を国文学の分野で活躍した人物と見なしていないからでもあります。彼女についてよく調べてみますと、実に和漢の学問に深く通じた人であったことが分かります。さらに、禪の公案に対する答えとして使われた和歌の作り手でもありました。国文学者は、禪僧の漢詩をおおいに評価し、五山文学として研究しています。けれども、たとえば、『湘南葛藤録』のなかには、尼僧による公案関係の和歌がたくさん記録されているにもかかわらず、禪の尼僧による、いわゆる「公案和歌」について、私の知る限りでは、研究している人は誰もいません。

中世において無外如大の公案和歌の一つがあまりにもよく知られるようになった結果、多くの伝説や物語がこれに基づいて作られています。したがって、ここには研究に値するだけの内容をもったものが存在しているといえます。尼僧の書いた、このような作品も、国文学の研究対象として取り扱われる日が来ることを願っております。

つぎに、いままでお話ししました尼とは、まったく違ったタイプの尼を取り上げ、日本の文芸の歴史において彼女たちが投げかける問題について考えてみたいと思います。

前から私は、熊野比丘尼と呼ばれている存在について深い興味をもってきました。なぜ熊野比丘尼という存在が、おもしろいのかといいますと、つぎのような理由からです。これは、前から気がついていたのですが、日本の仏教史について書かれたものを見ますと、仏教の教えを広めるという役割は、男性のものであるというふうに書いてあるのです。つまり、僧侶が若い僧侶に教えを説くと同時に、一般の人たちにも、仏教について説明して、伝道すると考えられてきたわけです。もちろん、ときには、教育のある俗人が、僧侶の代わりをしました。しかしその時でも、その俗人は男性でありました。たとえば、尊子内親王のために書かれた源為憲の『三宝絵詞』という作品を思い出してください。

一言でいいますと、われわれのもっている仏教史のパラダイムとしては、仏教を教える側は、男性であり、女性は学ぶ側であるという前提です。こういう仮定のもとに、日本における仏教像がつくられているといえましょう。

しかし私は、熊野比丘尼の存在はこの前提をくつがえすことができると思います。女性の側では熊野比丘尼が伝道のために大きな役割を担っていたと思うからです。熊野比丘尼は、日本における仏教の伝道師が女性であった場合の、一つの貴重な証拠としたいへん興味深い存在だと思います。資料的に、女性が女性に向かって宗教的な教えを伝える例が非常に少ない現状にあるからこそ、熊野比丘尼の正体を正確に見極めることが大切であると考えられます。しかし、熊野比丘尼に関する研究は混乱しているように見受けられます。文献的なデータから浮かび上がってくる熊野比丘尼のイメージと、絵画的なデータからのイメージの、両方があきらかに混乱しています。そのため、研究すればするほど、逆に熊野比丘尼に関する謎が増えるばかりです。

混乱の一つの原因は、いままでの研究方法にあると思われます。つまり、いろいろな資料をたんねんに読み、熊野比丘尼について書かれた特質をできるだけ多く集め、そこから熊野比丘尼に関する総合的なイメージを組み立てるという方法がとられたのです。このために熊野比丘尼は非常に奇妙な人物になってしまいました。つまり熊野比丘尼は、出家して、頭をそって、尼の衣にかえて、年末に熊野三山の深い山の奥にこもって、修行して、そして正月から遊行勧進比丘尼になって、「熊野の参詣曼荼羅」や「観心十界曼荼羅」などの絵解きをしたり、うつくしい声で歌を歌ったり、お化粧をしたり、売春にたずさわったりした、とのこと。これらの記述は、たがいに非常に矛盾している性質を描いているのではないのでしょうか。

こうしたモンタージュ写真をつくるようにして、熊野比丘尼の姿を再現するという方法は、研究の初期のころはともかくとしても、どうもこれ以上推し進めても得るところは少ないように思われます。ただ、誤解がないように申し上げておきたいのは、多くの方々の研究があったからこそ、こうしたモンタージュ

写真をつくるような方法が行き詰まっていると指摘できるようになったのです。もし、私たちの先輩の研究が行われていなかったら、こうした指摘すら不可能だったにちがありません。

私は、熊野比丘尼といわれているものは、実際には、たんなる一つの職業、または、宗教的活動ではなかったかと思います。文学作品や、絵画に現れる熊野比丘尼といわれる人たちの細部を注意深く分析すると、二種類の熊野比丘尼、すなわちAグループとBグループがあったのではないかと思います。私のいう細部とは、たとえば、着ているもの、座り方や立ち方、または、手にもっているものや、どういう場所で活動しているのか、どういう人たちを相手にしているのか、などです。ここで、ちょっと写真をごらんにいれたいと思います。

Aグループとは、(スライド) 典型的な絵解きをする熊野比丘尼です。頭をそって、白またはグレーのずきんをかぶって地味な尼の衣を着て、道ばたでござをひいて片ひざを立てて、絵解きを語る比丘尼です。Bグループも、(スライド) 熊野比丘尼と呼ばれることがありますが、私の目から見ると、完全に違う職業のように思われます。(写真2参照)

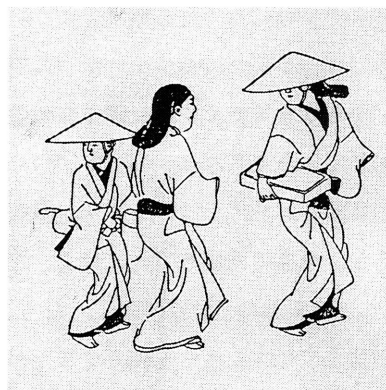
東インド会社の医師であったエンゲルバート・ケンファーが残した記録が、一つの証拠としてあげられるのではないのでしょうか。彼は東インド会社の医師として日本に来て、元禄3、4年ころ、つまり、1691年、九州から江戸城まで旅をしました。その途中に、いろいろ見聞きしたことについてくわしい記録を残しましたが、そのなかに歌を歌う比丘尼との出会いについて述べた部分があります。ケンファーは、この歌を歌う比丘尼は「熊野の比丘尼といわれている」と書いています。つまり、彼は、この呼び名を誰かから教えられたわけです。興味深いのは、この女性たちが、絵解きをするとはひと言葉も書いていません。また、なかなかの美人で、歌は上手で、旅に出ている男性のために歌を歌っておもしたりするのですが、遊女であるとは書いていません。ケンファーが見たものは、一服している人のために民謡のような歌を歌ってお金をもらっている風景ですが、彼女たちの上品さつつましさをほめています。ケンファー

写真 2

(Aグループ)



(Bグループ)



によりますと、ある熊野の比丘尼は、売春宿で生まれ、鎌倉や京都の尼寺にさげ費を払って、「熊野の比丘尼」という身分になったようです。こうして売春宿から解放されて熊野に住みつき、歌を歌うグループに属してお金を集めて生活しました。

私が思いますに、最初のスライド、つまり、Aグループに出てくる絵解きをする熊野の比丘尼（スライド）と、ケンファーが見た歌を歌う熊野の比丘尼（スライド）は、違うのではないのでしょうか。つまり、ケンファーの「熊野の比丘尼」は、Bグループだと私は思いますが、Aグループと同時代に存在し、同時代に活躍していた比丘尼であったのです。彼女たちは、職業、種類、属するグループは、完全に違っていたと思います。

いままでは、熊野三山に属していた絵解き比丘尼は江戸時代に入ってから世俗化され、大道で比丘尼のまねをして歌で生活して娼婦にくずれてしまったと考えられてきましたが、こういう見方は、まちがっていると思います。はじめから完全に別々のグループであったとしか考えられません。

江戸時代に「歌比丘尼」という呼び名の比丘尼が現れましたが、私は、これはBグループの、いわゆる歌を歌うことを中心とした芸能者であったと思います。いずれにしても、熊野とどういう関係にあったのか、ケンファーの記録を除けば、まだ何にもよく分かっていません。

不思議なことです。鎌倉時代の13世紀の『当麻曼荼羅縁起絵』のなかに描かれている尼さんは、（スライド）先ほどお見せしました17世紀のAグループの絵解き比丘尼そっくりです。服装にせよ絵解きするときの座り方（つまり、方ひざを立てた座り方）にせよ、たいへんよく似ていると思います。13世紀以降、400年ものあいだ同じような方法でこれらの尼さんは、絵解きという活動を通じて仏教の教えを伝えてきたわけです。だから、17世紀に入って、突然、絵解き比丘尼は娼婦にくずれてしまったと考えるのはまちがっていると思います。もちろん、娼婦のまねをした比丘尼、あるいは比丘尼のまねをした娼婦もいたにちがいないと思いますが、長い伝統を守り、仏教の伝道活動を続けた絵

解き比丘尼と混同すべきではありません。私は、Aグループの熊野比丘尼がこの役割を担っていたと信じています。つまり、女性に仏教の教えを説明したのは、地味で、まじめで、本物の尼僧の姿をした絵解き比丘尼だったと思います。

さらに、それとは別に芸能者として活躍した歌比丘尼、(スライド)つまり、ケンファーの見たような歌比丘尼についても、忘れるべきではありません。これについては、まだきちんとしたかたちで評価されていません。歌比丘尼は、江戸時代の演劇または芸能の歴史のなかで正式に位置づけられるべきだと思います。

私は、いままで熊野比丘尼という名でいっしょにされてきた人たちを、AグループとBグループ、あるいは、もしかしたらCグループが存在するかもしれませんが、いくつかのグループに分けようとしています。なぜ私が、これらははっきり区別する必要性にこだわっているかといいますと、それは、そうすることによって、仏教の教える側は、男性であり、女性は学ぶ側である、という前提をくつがえすことができると信じているからです。

いままでわれわれは、熊野比丘尼を遊行芸能者の一種として扱ってきました。私もいままで、論文のなかでそのように書いてきました。しかし、だんだんそういう見方をすべきでないと思うようになってきました。

熊野比丘尼というあいまいな呼び名のなかに、旅行中の男性のために休息場所で民謡のような歌を歌ったりする人たち、あるいは売春で生活した女性たちも含めると、宗教史の専門家は、Aグループに属した絵解きする熊野比丘尼を簡単に無視することができます。実際のところ、熊野比丘尼は、宗教史という学問のなかで無視されてきたわけです。

いまや、Aグループの熊野比丘尼は、(スライド) 仏教の女性伝道師としてはっきり認識すべき時が来たように思います。このほかにも、女性の伝道師は存在したに違いありませんが、少なくとも熊野比丘尼は、その実例の一つであったと思います。この事実を無視し続けているからこそ、日本の中世史がどこかでゆがんだような印象を与えているような気がします。どう考えても、仏教の

教えを広めるという役割が、男性だけのものだったという考えは、物足りないというより、おかしいと思います。

女性が仏教の伝道師であるというのは、なにも日本の独特の現象ではなかったことを指摘しておきたいと思います。アジアのいろいろな国々で、仏教は、長い歴史を通じて男性だけでなく、女性によっても広められました。彼女たちは、宗教的な絵画、語り、和讃、祈祷などを伝道の目的に使いました。

ここで、チベットの尼さんの写真をお見せします。(スライド) これらの尼さんは、マニパと呼ばれていますが、マニパとは、絵解き比丘尼を指します。ごらんの写真は、1909年ごろにスウェーデンのスペン・ヘディンがとったものです。彼は、つぎのような説明を残してくれています。「一人が語り物を語ると、もう一人が棒でその絵を指す。彼女の語りの声は、感情豊かで大変に美しく、聞いていて楽しい」

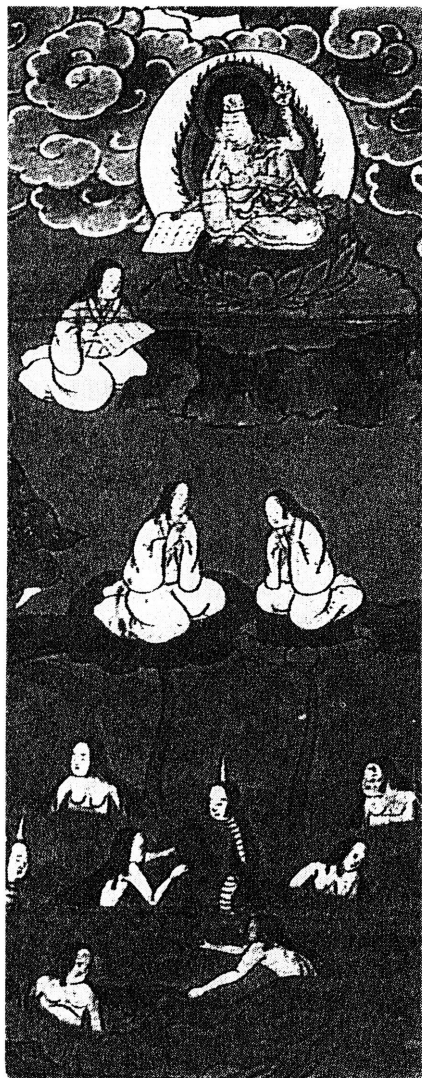
それでは、熊野比丘尼という女性の伝道師が、いったいどんな教えを広めていたかということ、それは、今後に解明されなければならない問題です。現在のところ、それに関する文学上の資料は整理されておりませんので、何も確実なことはいえませんが、ここでは絵画的な資料を使って、つぎにちょっと考えてみたいと思います。

絵解き比丘尼が使った掛け軸のなかに描かれているイコノロジーについて見てみたいのですが、ここでは『観心十界曼荼羅』のイコノロジーに焦点を当てたいと思います。(スライド) ご覧の通り、老いの坂とか、六道や、地獄の絵など、いろいろありますが、ここで一例として如意輪観音の謎についてふれてみたいと思います。

熊野比丘尼が伝道の目的で絵解きに使った絵画には、ほとんどの場合に、如意輪観音が血の池地獄の場面で女性の救済者として現れてきます(写真3参照)。(スライド) なぜ、如意輪観音がかならずとっていいほど、こうした場面に現れるようになったのか、これは謎であるといってもよいと思います。私は、この謎はつぎに説明する『血盆経』と関係していると思います。

『血盆経』とは、ご存じのように、いわゆる本物のお経ではありません。12世紀末期に中国でつくられ、血の池地獄を描いたものです。日本に輸入されたのは、たぶん、中世後期と思われますが、14世紀末期ころから徐々に広がって

写真 3



いきました。不思議なことに、この血の池地獄は、中国では、男も女もおちる地獄だったのですが、日本では女性だけが落ちる地獄になってしまいました。なぜ、そうってしまったのか、非常に複雑な社会現象もその背後にあり、よく分かっていません。しかし、日本ではここに如意輪観音が現れ、こうした恐ろしい地獄におちた女性たちを救おうとしたのでした。私は、熊野比丘尼がこれらのあわれな女性たちの救済のためにこの観音様を持ち込んだのだとおもいます。

熊野比丘尼と観音信仰とは、中世小説のなかでもたびたび取り上げられたテーマです。熊野比丘尼は、時には観音のお告げを伝えたり、または観音の化身と

写真 4



して描かれました。たとえば、奈良絵本の『たいま』という草子には、(スライド) 阿弥陀と観音と勢至は、尼僧の姿に化身しますが、これは当時の女性にとってとても喜ばしいことだったと思われます。(スライド) こうした熊野比丘尼と観音との一般的な結びつきに加えて、熊野比丘尼と如意輪観音の結びつきについては、如意輪観音が、少なくとも室町末期から熊野三山の那智の青岸渡寺の本尊であるということを描きつけておきたいと思います(写真4参照)。(スライド)

重要なポイントは、男性の僧侶が、『血盆経』を使って、血の池地獄の恐ろしさを強調し、女人禁制などに利用したのに対して、女性の伝道師である熊野比丘尼は、『血盆経』を恐ろしい

ものというよりも、安産のため、また出産のさいの苦しみや、出産のさいに死ぬかもしれないという恐怖をやわらげるための、あるいは一般的なトラブルから女性を守るためのお守りとして用いたことです。(スライド) 現在でも、熊野に行けば、お守り用として帯の下に入れられる小さな字で書かれた『血盆經』を買うことができます。私にはこれは、女性的な発想のように思われますが、それはともかくとして、私は、熊野比丘尼が『血盆經』の存在をそういうふうに変えたのだと思います。つまり、如意輪観音を持ち込んだとき、『血盆經』の性格が変容させられたといえるのではないのでしょうか。

如意輪観音の姿が、熊野比丘尼の使う絵のなかに現れるようになった理由について、上のような説明でご納得いただけるかどうか、分かりませんが、少なくともこのような謎に対して一つの説明が可能となったことは、熊野比丘尼を伝道者であったと考えたからです。つまり、伝道というものが男性によってのみ行われていたと考えた場合、如意輪観音の謎も説明できなかったのではないのでしょうか。女性も伝道活動を真剣に行っていたと考えることによって、このほかにも、いろいろ文学や絵画における問題が説明できるようになると信じております。

9世紀という早い時期から尼さんが六道絵を描いていたこと、そしてこれらの絵を宗教的な活動に使っていたことを、たとえば『日本霊異記』のなかの「平群の尼の話」から知ることができます。また、先ほどお見せした鎌倉時代の『当麻曼荼羅縁起絵』からのスライドを見ても、尼さんが阿弥陀浄土変相図の絵解きをしているのが分かります。したがって、もちろん男性はいうにおよばず、女性も地獄極楽についての教えを広めていたと結論すべきです。つまり、文学と絵画の両方の資料から、女性が早くから伝道活動にたずさわり、地獄極楽のことを教えていたのだということが分かります。さらに、『日本霊異記』のなかに出てくる「岡本尼寺の話」では12種類の観音像がこのお寺にあったことが描かれており、尼と観音信仰とのあいだに密接な関係があったことがここからも分かります。

日本文学と文化史における女性の役割について考える時、日本のことだけを研究しても、よく分からない場合があります。そんなとき、西洋と比較しながら研究するという方法は、われわれの視野を広げるだけでなく、新しい視点を与えてくれるかもしれません。そんなわけで西洋の文学と文化史における女性宗教者の役割についても、ふれたいと思いますが、時間もあまりありませんので、簡単にしたいと思います。

たとえば、仏教に「変成男子」という思想があります。これは、いろんな人たちが古代や中世の和歌や物語に現れていますように、女性は男性の身体を獲得して、はじめて成仏できるという考え方ですが、仏教だけに特有な考え方であると思っておりましたら、実は、キリスト教の伝統のなかにも、初期のころに、同じような思想が見られました。2、3世紀頃ですが、宗教的救済を得るためには、女性たちも、キリストと同じ精神、同じ肉体、そして同じ性、つまり、キリストと同じような男性にならなければならないと考えられたのです。そのため、女性らしい髪や衣服を捨て、きびしい修行をし、女性らしさをすべてぬぐい去ることが行われました。しかし、その後、5世紀頃に聖アウグスティヌスは、女性の身体は宗教的救済のために欠陥とはならないこと、また復活のさいに男性の身体を必要としないことを説きました。しかし、キリスト教でも女性の身体は、いろいろな問題の原因となりました。

日本では、尼僧がみずからの顔を焼いて、醜くして修行をはじめたという話がいくつも残っています。醜くしないと、修行の場に受け入れてもらえなかったり、また男性僧侶の指導を受けることができなかった場合などがありました。西洋でも、同じく女性が顔と身体を醜く見せようとした話が残っていますが、多くの場合、強姦されないように醜くしたのです。有名な例は、9世紀、イギリスのある修道院では院長以下すべての尼僧が、デンマークの兵士に強姦されないように、みずからの鼻と上唇を切り取ってしまいました。これらは、日本と西洋の違いなのか、それともさがせば、似たようなケースがいろいろ出てくるのか、今のところ分かりません。

宗教でなく、文学の場合となりますと、言語によって事情がいろいろ異なりますので、単純に「西洋」との比較ということで考えることはできません。したがって、言語ごとに別々に見て行く必要がありますが、たとえば、ギリシアですが、よく知られているように、演劇作品が紀元前4、5世紀頃に男性の手で男性のために書かれていました。しかし女性も、紀元後1世紀という早い時期に女性を主人公とした小説を書いています。(スライド) 日本の絵巻物に似た作品が、つまり、物語と挿し絵が一体となった巻物が紀元後2世紀から残っており、(スライド) これらの世俗的な物語のなかでは、女性が結婚しないで、キリスト教の尼僧になろうとする悩みなどが描かれています。

また英語圏では、古代英語の時代に女性の作家が存在したかどうか分かっていませんが、中世英語の時代には、女性によるいくつかの作品があります。それらはすべて女性宗教家の手によるものです。(スライド)

フランスの場合は、状況はかなり違ってきます。というのは、書き言葉としてはラテン語だけであり、フランス語は書き言葉として9世紀まで使われませんでした。聖書はラテン語からフランス語に翻訳することは禁じられていましたが、これは、経典が今日でさえ漢文で書かれたままにある日本の状況と似通っているように思われます。フランス語で書かれた文学と見なせる作品は、14世紀初期、クリスチヌ・ド・ピザンという女性によって書かれています。(スライド) 彼女は、たとえば有名な『女性たちの都』のなかで男性の神学者によって展開された女性への偏見に逆襲を加えています。このように、それぞれ事情が違うので、一言では何もいえません。

つぎに、音楽の分野に目を転じますと、たとえば琵琶法師の『平家物語』や、安居院流の『神道集』や謡曲におけるように、この男性が中心に活躍した分野は文学と密接にかかわってきました。しかし、『日本霊異記』のなかに描かれた比丘尼のように、美しい声を伝道活動の一つの道具として用いた事実は、ほとんど注目されるにいたっておりません。こうした比丘尼の例は、なにも日本だけでなく、アジアでも西洋でも広く見られました。最後に、女性による伝道

や文学の活動に音楽が果たした役割に簡単にふれてみたいと思います。

現在、世界中でもっとも古い女性による文学作品は、パーリー語で書かれた『テリーガター』であるといわれています。紀元前6世紀頃にインドに誕生し、紀元前1世紀頃には書き写されたのですが、実はこれは、仏教の尼僧によってつくられた宗教的な歌謡でありました。尼僧たちは何世紀ものあいだこれらの歌を伝道活動に使いました。彼女たちは、これらの歌をたずさえ、あちこち移動しながら民衆のあいだに仏教の教えを広めていったのです。

『テリーガター』を読むと、日本の『梁塵秘抄』のなかの仏教関係の今様や、説話文学にたびたび現れる比丘尼のことが頭に浮かびます。比丘尼は美しい声で多くの人を魅了し、たくさんの信者を獲得しました。女性が歌ったこの宗教詩歌は、女性が別の女性に向かって送った信仰のメッセージであったわけです。『テリーガター』は、女性特有の日常的苦痛や信仰生活がどういうものだったかを知る手がかりを与えてくれます。

ヨーロッパにおいても、宗教活動を展開するうえで、女性宗教家が文学や音楽を用いたことが、注目を集めはじめています。近年、尼僧の修道院における音楽活動がとくに問題にされるようになってきました。つい最近までグレゴリオ聖歌は、男が修道院で歌っていたとされていましたが、実は、これは尼僧の修道院でも中心的な活動の一つでもありました。(スライド) しかも、最近の研究によって、多くの教会音楽は、尼僧によって作曲されていたことが分かっています。おそらく、12世紀、ドイツのペンデンにあった尼寺の院長、ヒルデガルトがこの方面ではもっともよく知られている女性宗教家ではないでしょうか。(スライド) ヒルデガルトといえば、詩集や哲学の分野で有名ですが、音楽の方面でも作品が発見されるなど、活躍しています。最近、この12世紀の尼僧のいくつかの作品がCDでも聴けるようになっていきます。

こういうふうに見てきますと、結局のところ、女性宗教家の活動に注目してはじめて、われわれは、文学、音楽、宗教の三者の結びつきが世界的に共通した現象であったことを明らかにできるのではないのでしょうか。どうもそんな気

がしてなりません。

日本人は平安時代における女流文学の黄金期を誇りに感じています。私は、それは正しいと思います。平安期の女流文学は、世界的にも有名ですが、それは、多くの学者が、こうした女流作家を評価し、翻訳したからです。彼らの努力によって彼女たちは、世界的に著名な存在になりました。いまや、海外において紫式部や清少納言たちは、日本にとって現代の政治家たちより良き外交官になっているといえましょう。しかし、残念なことに、同じく外国でよく知られ、もっともらしく思われているのは、平安時代以降の、今日までに至る歴史のなかで、女性は創造的な仕事は何もしてこなかったということです。実際のところ、日本でも中世の女性が文学や音楽や宗教において行ったいろいろな貢献について何も教えられていません。尼寺五山の無外如大、また彼女の和歌に見られる深い洞察のあとについても、まったく学ばれていません。さらに、熊野比丘尼の掛け軸の絵、歌、語りなどのなかには、女性を論すのではなく、慰みを与えるといった、彼女たち独自の仏教に対する解釈のあとが見られますが、こうした創造性についても、何も教えられていません。

ここ十年ほどのあいだに、インドでも中国でも欧米でも文学や文学史における女性宗教家の役割を見直す研究が盛んに行われており、その結果、多くの分野で歴史が新しく書き直されつつあります。日本においても、仏教の教えを広めるうえでの、女性宗教家の役割を再評価する時が来たように思われますが、いかがお考えでしょうか。

長いあいだのご静聴、有り難うございました。